

原始仏教に於ける法身觀

良 木 伸 孝

原始仏教經典(特に阿含・ニヤヤー)に於ける法身觀は、大乘經典とか論に於けるような形而上的に進んだ思想でなかつた。大乘仏教で法報応・法応化といわれる三身は原始經典の法身が拡大し増大したものである。それでは原始經典に於いては法身は何を意味するのか。種類としてはどんな法身観があるのか。又その内容等を考察し、原始仏教に於ける法身を解明したい。法身を解明する上に先づ仏弟子達が仏陀の入滅をいかに解釈したかが問題解明の才一步である。肉体を有し歴史的にインドに出生なされた仏陀(人間釈尊)も、仏教で言うところの無常の理に相違なく入滅なされた。仏陀入滅による仏弟子達のかなしみは、長阿含遊行經にある如く大變なものであつたと思われる。しかし仏弟子達はかなしむ一方、

仏陀の入滅は無常の教であり。かなしむべきものでないことを充分知つていたのであつて、彼等の信仰は仏陀の人格とその教法(無我と無常を本質とする)によつて存在したのであり、このことは仏陀自身も常に教えられたのである。^②同じく遊行經に「一 萌類・皆当捨諸陰・仏為無上尊・世間無等倫・如来大雄聖・有無畏神力・世尊当久住・而今般涅槃^③」と説いている。これは仏陀は人天の師で最上尊であるけれどもその肉体はルンビニーの園に生れ、諸所に遊行苦行した現実の人で、仏教の本質である諸行無常の理によつて、仏の肉身と雖ども死を免れ得なかつたという一種あきらめの傾向と仏陀の入滅は円満の死であるという二通りの解釈が出来るのである。このことは遊行經に「されど今回は仏陀として、終に円満に世苦を脱し又多くの人を利益して入滅す^④」とあることによつてもわかる。このように仏陀の入滅は仏弟子達に無常必然と究竟円満との二方面から観じられたのであるが、仏陀の入滅は全くの消滅なるかという疑問と、その常住の本体はいづれかに存在するであろうという要求

ならしめようとする要求、希望を、仏陀の入滅は全くの消滅であるかとの疑問、即ち死後如来が存在する存在しないか、存在するとすればそれはどんな形なのか、という二つの疑問が仏弟子達の間に起つて、如来法身常住不滅の思想が仏滅後に盛んになり、法觀念の発達に従つて法身觀に種々の相違が興つたのである。いまそれらを系統的に分類してまとめらば、

(一)教法法身說 法とは説法教法のことで、『增壹阿含經』で阿難が「法を依所とす」と述べているところの法であり、如来の入滅は肉身の死であつて仏所説の教法は永遠不滅であるとし、仏滅後の仏弟子達の帰依拠は教法そのものであるとする。仏滅直後から六、七百年間、四、五回に亘つて三蔵の結集が行われたという伝記は法身常住のための仏弟子達の行事であつたと見てよいと思う。又在家信徒の法身永遠不滅の信仰のあらわれとして、仏陀の遺物保持永存、遺身舍利の追慕崇拜などが見られる。要するに教法法身とは、法蘊を永遠不滅とした法觀念である。

(一)五分法身說 戒・定・慧・解脫・解脫知見を合稱したもので、いずれも仏陀が色身上に體驗した行の徳目の集積を指している。釈尊在世にもすでにおこなわれた思想で諸經論に見られるが、特に部派仏教に於いて主として説かれてゐる。即ち大衆部に於いては仏身無漏説を主張し「如来の色身は實に辺際なし、如来の威力も亦辺際なし、諸仏の寿量も亦辺際なし」といい、又「比部（大衆部）の説かく仏は多劫を経て報身円極の法身を修得し、辺際あることなし、所見の丈六は實の仏身に非ず、機に随つて化するが故に」^⑨といつて、大衆部に於いては仏身無漏説を主張している。

(一)真如法身說 法身の本質を理智不二とするもので大乘で説く法身觀である。しかしその源泉は仏陀所証の正法・一乘道・古仏道・縁起法などにあると見做してもよいから、^⑩原始仏教にも真如法身説の萌芽や前提思想が多く見出されることを注目しなければならない。

以上三法身説に分類したが、要するに仏入滅を契機として、仏在世の時は仏陀の人格に帰依していた仏弟子達

が、仏所説の法に帰依するようになり、それがやがて法と人とを合一して法身常住の思想を生み、法觀念の發達に従つて法身觀にも種々の相違が起つたのである。ここで法身の原語 *dhamma-kāya* がどんな意味を有するか、又原語的な法身とは何かを考察しておきたい。

Edaerton Sanskrit Dictionary によると法身とは *Collection, Mass, Crowd,*

to tality とする意味があり、梵和大辞典（荻原雲来著）によると、集団・多数・集合・漢沢では身・体・身体・聚・衆とである。これらの意味からして法身とは法の集り（法蘊）で原始仏教の法身とは教法であつて、仏陀の人格のかわりとして法をたて、その法は永遠不滅であるとする思想が法身常住と呼ばれたもので、大乘仏教で説くが如き形而上的に進んだ思想ではない。

結論的にいふならば、仏陀入滅を契機として仏弟子達の間に仏入滅後も如来の本体となる何ものかがあつてほしい（帰依の根拠となるもの）という希望あるいは願望が仏入滅は肉体の死で、如来の本体は当然あるべきであり

あらねばならぬとする必然性（當為）をおびるようになり、ついに如来の本体はあるんだという實在性を持つようになつて、その本体に仏所説の法（仏によつて生かされた教法）を考え永遠不滅なるものとした。これが原始仏教でいう法身の思想である。要するに、教法の生きた人格化、これこそが原始仏教の法身である。

註記

① 本論文にては從來の原始仏教の範圍に部派仏教を加味して原始仏教と呼んだ。

② 「阿難よ我は斯く日はざりしや。凡ての愛しく好める者と雖も、〔生〕別し〔死〕別し〔死して後境外を〕異にすると……如来は確かに決定して比の言を述べぬ。

久しからずして如来の般涅槃はあるべし。
之より三月の後如来は般涅槃に入るべし」

（南伝七・九三）

③ （大正一・二六下）

④ (南伝七・一三二―一三四)

⑤ (南伝七・六八)

⑥ 大般涅槃經に釈尊自らの言葉として「阿難よ、我れに依りて説かれ、教えられた法と律とは、我が滅後に汝等の師なり」(南伝七・一四二)

⑦ 釈尊が王舎城の竹林精舎に住んでいられた時のある日、陶工の家で病床にあつたバツカリ比丘を慰問された。バツカリは病床に臥しながら、「大徳よ、すでに久しく世尊を見たてまつるために参詣したく願つていましたが、もはや私の体には、世尊を見たてまつるべく参詣するほどの力もなくなつてしまいました」と訴つた。釈尊は「ああバツカリよこのような朽ち行く肉体を見ても何んにもならないぞ。バツカリよ、法を見るものは我れを見る。我れを見るものは法を見る。バツカリよ、法を見て我を見る我れを見て法を見る」と教誡せられた。(南伝二二・八七)(雜阿含四七・二五・増阿含二六・一はこの語を欠く)。

⑧ 宇井伯寿博士訳「阿育王刻文」(南伝六五・二一―二二)

⑨ 異部宗輪論述記(中一七)

⑩ 「雜阿含」十二に古仙人の道を縁起法なりとし

「縁起法者非我所作、亦非餘人作・然彼如来出世及未出世法界常住」とあり、「増一阿含」序品には「於法当念故・如来由是生・法興成正覚」とある。

涅槃經に於ける仏性説について

土井成忍

大乘の涅槃經はやはり臨終の説法とはなつてゐるが、仏入滅前後の事實を記述するのを目的とするのでなく、法身常住を説いて、仏には本より生もなく滅もない其生滅の相を現ずるのは畢竟衆生利益の爲であつて唯其色身であると言ひ高妙な教義を述べてゐる。所謂仏性を論じた法身常住經である。